

瀬川昌久編

『香港社会の人類学』

——総括と展望——

風響社 1997年 290ページ

沢田 ゆかり

I

「香港は中国の一部」という観点は、政治や歴史の分野のみならず、経済、文化の面でも、香港研究に強力な影響力を及ぼしてきた。人口の9割以上が中国系住民であるということ、中国大陸に隣接するという地理的条件、中国大陸との経済上の高い相互依存度などを挙げるまでもなく、香港を論じる際には中国との関係に触れざるを得ない場合が多い。しかし上記の観点を強調するあまり、香港を単に「中国の切れ端」と位置づけるなら、香港のもつ独自性を見過ごす恐れがある。それは同時に「中国」の抱える多様性の動的な把握を困難にする。

香港を対象とする文化人類学もまた、こうした構造から自由ではなかった。戦後の文化人類学は、方法論としては現地社会への浸透を重視しながらも、香港をあくまで「中国の標本」として取り扱う傾向をもっていた。中国革命後、外国人による大陸での現地調査がほぼ不可能な状況下において、香港は真っ先に「残された中国」として研究者の注目を浴びたからである。とりわけ新界地区は、かつての「伝統的な」華南の農漁村を知る手がかりとなる「生きた化石」として、フィールド・ワークの対象となった。

本書は、このような香港分析と一線を画し、香港社会の独自性を真正面から取り上げた力作である。全体としては、戦後に香港が辿った歴史的変遷を踏まえ、経済成長と都市化のなかで、香港独自の社会が形成される過程を描いている。しかも本書におけ

る独自性の追求は、中国大陸との差異の強調にのみ限定されているわけではない。むしろ本書は、香港と中国大陸との交流が拡大するなかで、「中国」をも含む新たなモデル化に挑戦する姿勢を見せている。

執筆者は9名の比較的若手の研究者で、それぞれ1章ずつ各自のテーマにそって研究史を総括し、そのうえで問題意識を展開している。研究史の部分には若干の重複が見られ、研究史の比重が高い章は入門書の色彩が色濃いが、そうでない章は個別の論文としての性格が強い。また章によっては問題点の提示が中心で、論証に至らないものもあり、各章の完成度には大きな差があった。しかも本全体としての結論は明示されていないので、まとまりに欠ける印象を受ける。

ただし脈絡のない寄せ集めの論文集にはなっていない。これには本書が3部構成をとって、各章を題材ごとに分類しているためでもある。第1部は香港の農村部である新界の研究、第2部は戦後の都市社会の分析、第3部は多様なエスニシティの考察である。第1部と第2部では、既存研究の推移と課題が冒頭章に提示されており、各部の論文の位置づけを確認することができる。

本書の構成と執筆者は以下のとおりである。

- | | |
|--|--------|
| 序 | (瀬川昌久) |
| 第1部 香港新界研究の軌跡と新たな展開 | |
| 第1章 香港新界の宗族村落——生きた化石における伝統の再生 | (瀬川昌久) |
| 第2章 遅れてきた革命——香港新界女子相続権をめぐる「秩序の場」について | (深尾葉子) |
| 第3章 香港の離島コミュニティに見られる都市性——長洲島・太平清醮の祭祀集団 | (中生勝美) |
| 第2部 香港都市社会研究の現在 | |
| 第4章 香港都市社会研究の展開と課題——人類学と社会学の分業を越えて | (大橋健一) |
| 第5章 公共住宅・慈善団体・地域アイデンティティー——戦後香港における社会変 | |

『アジア経済』XXXIX-9 (1998.9)

- 化の一面 (芹澤知広)
- 第6章 都市社会香港における葬儀の担い手の
変化——『喃嚨佬』から『経生』へ
(志賀市子)
- 第3部 国際都市のエスニシティー
- 第7章 香港人であることと中国人であること
と——香港の社会変動とアイデンティ
ティー (日野みどり)
- 第8章 香港のインド人企業家——歴史と現状
の予備調査報告 (沼崎一郎)
- 第9章 香港の一日系スーパーマーケットの組
織文化 (王向華)

II

次に各章の内容を紹介しよう。

まず第1章は、従来の新界農村の宗族に関する研究を時系列で紹介し、それぞれの時点での問題点を指摘している。新界の宗族村落を分析対象とした従来の文化人類学は、大別すると(1)父系出自集団の「分節リネージ体系」モデルを中国に応用し、一般理論の構築を意識する研究、および(2)歴史家との提携から個々の宗族の発展過程を解明する地域社会史の研究、という2系統があった。しかし前者は、新界を「中国本土の代替物」と見なしたため香港社会自体の研究につながらず、後者も中国人社会一般と香港特有の事象を区別することには成功しなかった。

これらの反省点に立って執筆者は、香港社会の独自性を意識して、新界に保存されてきた「伝統的」な中国を再検討している。この結果、新界の宗族村落が持つ「伝統社会」は、革命なき中国がそのまま保存されたのではなく、戦後になってから新界の住民が再定義を加えて成立したものであることが明らかになった。すなわち戦後の新移民の流入と都市化の衝撃のなかで、新界の旧住民たちは自らの優位性を「伝統文化の保持者」という役割に求め、これに対応する宗族社会の保存に力を入れた。こうしたアイデンティティーの形成過程には、新移民との対比を確認する学者や観光客などよそ者の目が触媒として作用しており、新界最大の宗族村落の観光地化に

その例を見ることができる。

第2章は、新界の女性の不動産相続権をめぐる権利闘争を題材に、宗族の意味が新界のみならず現在の香港社会全体でどのように位置づけられているかを考察している。新界の原居民(1898年の租借以前から新界に居住していた人々とその父系子孫)は、歴史的経緯から地元の不動産に関する特権を保持してきた。ところが、これが女子の相続権を制限するものであったため、近年になって「男女平等」を楯に立法評議会で法改正の動きが起きた。これに対して新界の原居民は改正反対の運動を起こしたが、その折に彼らが現状維持の正当性として掲げたのは、「中国の伝統保護」であり、また議会の「西洋かぶれの教育を受け」(54ページ)たエリートが投げかける「植民地下における文化的影響に対する抵抗」(51ページ)であった。

これに対して執筆者は、新界特有の不動産相続権は、上記のスローガンとは裏腹にむしろイギリス植民地支配の産物として温存されてきた点を確認し、改正派と反対派の両陣営のジレンマを描くことで、単純な「中国対西洋」「伝統対近代」では割り切れない二極構造のゆらぎを分析している。

第3章は、都市と農村を媒介する「民俗社会」として、離島を取り上げている。ここで研究対象になった長洲島は、香港島までフェリーで1時間の場所に位置していることから、都市のベッドタウンと化しており、人口の流動性も高い。執筆者は、この島で毎年実施される「太平清醮」呼ばれる宗教儀礼を対象に実地調査を行い、都市化する離島コミュニティが伝統祭祀にどのような影響を及ぼしたか、を検証している。

その結果、太平清醮の担い手については、祭祀集団への参加が島民に限定されていないこと、住民は組織原理の異なる複数の集団に個人として参加できること、祭祀に参加しないという選択も可能であること、が明らかになった。また儀礼の内容からも、さまざまな出身集団の習慣を包摂しながら、従来のそれとは異なる「伝統の創造」へと向かっていることが分かった。

執筆者は上記のような選択肢の拡大を「都市的特

徴」と指摘しているが、長洲島の祭祀の変化を、平板な農村社会の都市化とは捉えていない。祭祀集団の構成原理が、宗族の祖先祭祀や同郷会の結社原理に類似していることから、都市化されたコミュニティにおける農村的要素を指摘することを忘れていない。その背景として執筆者は長洲島の住民に、中国大陆からの移民第1世代が多く、郷里の農村との絆が強い点に着目している。

第4章は、都市社会を対象とした香港研究の展開過程を紹介し、その問題点を指摘している。この章は、第2部の導入部に当たり、第1部で農村社会の研究史を整理した第1章に相当する役割を、第2部で果たしている。そのため社会研究の展開に関しては、第1章と重複する部分があるが、114ページのフローチャートが分かりやすく、読者の混乱を防いでいる。

執筆者は研究史の潮流が(1)参与観察を中心とする人類学者の新界における村落社会の研究(「フィールド・ワーク」型)から、(2)数量分析を中心とする社会学者の香港・九龍における産業都市社会の研究(「サーベイ」型)へと転換した過程を描きだし、これが香港社会自体の都市化に連動した動きであったと述べている。ここで重要な指摘は、両者の間に分業体制が確立したために、「フィールド・ワーク」型の都市社会研究が抜け落ちてしまったという点にある。

確かに現実の香港社会は、上記の分業体制を越えた変容を遂げつつある。すでに村落には都市化の波が押し寄せている。また都市部はグローバリゼーションのなかで、周辺諸国を繋ぐ結節点の機能を強めている。このような状況下で、新界を「残された中国」とする見方も、香港・九龍を農村部との対立軸で捉える方法も、執筆者の指摘どおり説得力を失っているといわざるを得ない。こうした問題に対して、執筆者は新たな研究の方向として、移民による香港社会の世界への拡散と、非中国系住民の活動する世界都市香港の研究を示唆している。

第5章は、新界の公共住宅における慈善団体の募金活動を題材にして、都市化による新たなコミュニティの形成過程を描写している。執筆者はまず、

慈善団体の資金調達の対象が、従来の男性企業家で構成されるエリートから女性を含む一般市民へと交替したことを明らかにし、香港社会の「大衆化」を指摘する。また大衆のコミュニティとして公共住宅の互助委員会に焦点を当て、彼らの募金活動を例にこの組織の役割を分析している。さらに募金活動の「大衆化」とともに、都市部と新界の別が無意味になり、「香港という大きなコミュニティが成立」(151ページ)したことが指摘されている。これに加えて執筆者は、この公共住宅の生活経験が、「香港人」のアイデンティティーの拠り所として論じられる現状を紹介し、流動的な香港人のアイデンティティーと変動する地域社会の関係を考察した。

第6章は、葬式儀礼を題材に、都市社会における新たな民俗宗教の出現を描写したものである。具体的には葬儀の担い手として台頭した「道壇」と呼ばれる宗教団体を調査し、その葬式儀礼の内容と構成員のあり方から、葬式が共同体の手を離れて、より個人的な選択の対象となった経緯を明らかにしている。

「道壇」が台頭した背景は単純ではない。「道壇」が郊外に土地を保有していたため、生活レベルの上昇した市民の墓地需要に応じる基盤があったという物理的な条件もあれば、女性の識字率の上昇により、「道壇」で儀礼を担当する「経生」と呼ばれる道教儀礼の担当要員に、人件費の安い中高年女性が参入したことなど教育面での変化も挙げられている。しかし議論の中心は、執筆者がフィールド・ワークを行った儀礼内容と儀礼担当者の位置づけにある。

従来の葬式儀礼は、「喃嘸佬」と呼ばれる男性道士が執行した。彼らはしばしば世襲であり、専門職として生活のために儀礼を担当し、死の儀礼を行う代償として報酬を受け取った。その儀礼には、瓦を割ったり炎を飛び越えたりという芸能的性格が残っている。一方、道壇の「経生」には中高年女性が多く、アマチュアとして参加しており、儀礼の代償としての報酬は受け取らない。彼女たちが手にするのは「ご祝儀」のみであり、儀礼の内容も読経が中心でアクロバットの要素は排除されている。

執筆者は「喃嘸佬」から「経生」へと葬儀担当者

が変化した現象を、伝統的なコミュニティの解体と都市中産階級の台頭のなかで、葬儀が専門職人の手から個人の信仰重視に転換した表れと分析している。しかしそれ以上に興味深いのは、「経生」の台頭が単純に「喃嚨佬」に取って代わるものではなく、旧来の儀礼の文法に則って、新たな価値を付与するものだったという指摘である。すなわち特殊な芸能を持たないアマチュア女性が葬式儀礼を担当する過程には、「喃嚨佬」への偏見を含む古い社会通念との棲み分けが必要だったといえよう。

第7章は、現地の研究成果や出版物の動向から、香港人アイデンティティーの本質を模索する試みである。執筆者が主張するのは、アイデンティティー問題が抱える多面性と流動性である。とりわけ香港では「香港人であること」と「中国人であること」が意味する内容が返還前後から大きく変化しており、こうした揺れ動く重層構造を一般化するのは困難かつ慎重を要する状況にある。

執筆者の議論に興味深いのは、香港人にとっての「中国」が多面性を持つにもかかわらず、文化的・民族的な中国への愛着が、政治体制としての中華人民共和国への忠誠心と混同して表現されるという点である。そして故意であれ無意識であれ、香港の若者は「中国」と向き合うために、心理的負担の少ない美化された中国を選択して、自らのアイデンティティーに織り込んでいる。その一方で彼らは、現実の中国には積極的に関わるまいとするという。

第8章は、香港経済界の一翼であるインド人企業家に関する考察である。執筆者はインド人企業家を時代別に分析し、戦前と戦後では彼らの経済活動の内容もその担い手も変化したことを明らかにしている。すなわち戦前期にはイギリスのアジア植民地支配に組み込まれる形で、パールシー商人やイスラム商人が香港に貿易の拠点を築いた。これに対して戦後は、インド・パキスタンの分離独立を背景に、難民として流入したシンディ商人が、新しい国際貿易を切り開いてきた。こうした歴史的経緯を考察すれば、1997年の返還に対する彼らの反応を「インド系住民」の反応として一括することができないのは当然といえる。祖国を失った難民出身者や香港のみ

を拠点にする小売業者には、返還は大きなリスクを意味する。しかしインド国籍を確保する戦後移民の貿易商には、返還は新たな活動拠点を探すべきにすぎない。

執筆者が文中で述べるとおり、本章は予備調査報告であって、普遍性のある結論には至っていない。ただインド人の「合同家族企業」を漢族の家族企業と比較した点は興味深い。本章の記述によれば、漢族の家族企業の場合、兄弟間の共同経営といえどもそれぞれが独立した出資者であるのに対し、インド系の「合同家族企業」は父子・兄弟などが単一不可分の所有主体・経営主体として企業を運営するという。

第9章は、香港に進出した日系企業に見られる組織文化の分析である。執筆者は実地調査で得た独自データをもとに、日本人社員と香港現地社員の間に「エスニシティ意識」が発生する理由を検討した。それによれば「日本人派遣社員」と「香港現地社員」の意識の差は、文化的な差異よりも、むしろ日系企業の二元的人事制度に見られる構造的不平等にあるという。したがって正社員という人事上の身分がない現地採用の日本人女性社員は、「日本人」としては扱われない。

また上記の人事制度のため、現地社員の出世には、日本人社員との良好な関係が決定的な影響力を持つ。ゆえに語学力や日本人社員へのサービスが不可欠となり、現地社員間の競争は「日本人」をめぐって展開される。このように執筆者は「エスニシティ」が不平等を正当化する道具となり、またこれに基づく行為の反復が仮想的文化背景を作りだすと主張する。こうして「会社は一つの家族だ」との社是を掲げながら、送別会や歓迎会、忘年会には現地社員は参加できないという現象が成立する。

III

1997年7月1日の返還と前後して、日本では香港関連の図書が多数刊行された。しかし、香港社会そのものに視座を据えた本格的な研究は非常に数が少ない。本書はその意味でも、貴重な一冊であること

は間違いない。

しかし、全く不満が残らないわけではない。そのひとつは、各章の間で提起された問題の内容が、本全体を通じて整理されていないことである。最も気になったのは、第2章と第4章、第7章の「香港と中国」に関する記述である。

第4章は「香港・九龍と新界」を「都市と農村」で論じる二極モデルを「今日的論議ではすでに乗り越えられたもの」としており、「説得力に乏しいもの」と論じている(119ページ)。

これに対して第2章は、58ページで示された「近代・伝統」、「洋・土」「西・中」という二項対立の図式に「都市・農村」と「新界(大陸)・香港」をはめ込んでいる。もちろん第2章は、この対立が内包する「ゆらぎ」にも言及しているが、あくまで二項対立の枠組みを前提としている。

しかし「近代・伝統」「洋・土」「西・中」は、イギリス植民地支配のなかで、対立すると同時に相互に支えあう要素でもあった。たとえば「洋」(イギリス政府)が新界住民に特権を付与したのは、清朝時代の中国人の慣習法という「中」の「伝統」に基づいてのことであった。また「中」は必ずしも「土」と「伝統」を支持しない。中国政府は新界の女子相続権に関しては、イギリス統治下での変更を黙認した。

この中国政府の方針は第2章の執筆時点で明らかにされていないと思われるが、61ページの

「……中国政府が、新界郷議局との力関係から、『新界の伝統を守る』ことを支持するというむしろこれまでの植民地政府的政策を継承する方向に出ている」という記述は、60ページの図とともに、中国「大陸」は「土」と「伝統」を体現する新界原居民を支持するという印象を読者に与える。

確かに中国は植民地政策を継承する方向を打ち出しているが、それは新界の伝統を守るためというよりも、むしろ香港全体に対する支配を確立するためであろう。だからこそ中国は統治の根本に関わる立法評議会の選挙方法やデモ・結社関連の条例については、脱植民地政策を目指す駆け込み改革を否定している。一方、新界女性の相続権については、香港全体の統治には影響が少なく見られたため、返還前の変更を黙認したのではないか。

そうであれば第2章で紹介された新界住民の意識には、第7章が指摘するような政治体制としての中国と文化的・民族的な中国の混同が見られるということになる。興味深い論点だけに、総論を設けて第2、4、7章の分析を整理する場があれば、より刺激的な議論が展開できたと思う。

以上のように、全体を通して、問題の提起が中心の章と事実紹介が主体の章とが錯綜しており、必ずしも前者の問題提起が後者によって実証されているわけではない。こうした問題を解消するためにも、全体を総括する総論があった方が望ましいと考える。

(神奈川大学外国語学部助教授)